

文化

芥川賞に決まって

石沢 麻依

オンラインでの受賞記者会見を終えた後、声や人のなかつた。

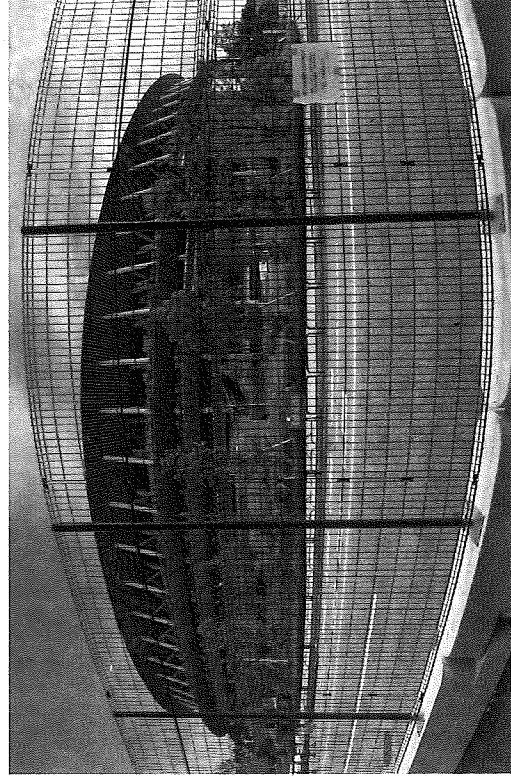
難しく、日本の様子はハンコンの画面越しにしか垣間見えない。それを総画のうちに、額縁の中に閉じ込められたままのそれは、私には遠いものとなる。切り取られた画面が作る距離感

というのが実生活で、そして感覚において、重要なキワードとなってきた。私たちは、家族や友人、社会

空間的、心情的な距離感はない。距離を無視した総組みが作られ、視界に入れるものを選ぶように場所もまた切り取られてゆく。あたかも、限られた時間空間でしか、被災地は存在しないかのように。

ゆく。毎年3月が来るたびに、私たちの眼差しは近づいては離れてゆく。確かに、書物的な視線は過去を記憶に向かつて大接近する。だが、いつかは目を向け、どこまでも遠くへと離れていくことを覚悟する。

◆第1、混じり合う語りの魅力



金網に囲まれ人を寄せつけないオリンピックスタジアム (国立競技場) (東京五輪の期間中に筆者撮影)

沖繩にとって「初めての日本の五輪」は、バツハイOC会長がいみじくも言った通り、「歴史的な大会」として記憶に残ることである。緊急事態措置下の大会をどう伝えるか、どのメディアも悩まるところであった。ここでは期間中の新聞報道をそれぞれ紹介しておく。沖繩地元紙の

メディア時評

山田 健太

(8月)

祝祭そして汚染水

その前に琉球新報1964年10月10日付を振り返る。復帰前の島内を回る聖火リレーの記事もそつた

ほか、開催地から東京新聞と神奈川新聞、在京全国紙の読売朝日、毎日産経日経の各紙を比較検証してなる。

沖繩にあって「初めての日本の五輪」は、バツハイOC会長がいみじくも言った通り、「歴史的な大会」として記憶に残ることである。緊急事態措置下の大会をどう伝えるか、どのメディアも悩まるところであった。ここでは期間中の新聞報道をそれぞれ紹介しておく。沖繩地元紙の

東京五輪期間中の新聞1面トップ記事の内容 (筆者調べ)

新聞	7月							8月									
	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9
読売新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
産経新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
東京新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
毎日新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
神奈川新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
朝日新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
琉球新報	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
沖縄タイムス	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪
日本経済新聞	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪	五輪

■ 五輪 □ 五輪(メダル以外) ※ コロナ 五輪とコロナ 五輪以外の記事が並列

新聞各紙 違い際立つ コロナとバランス模索

緊急事態下の五輪

つたが、開会式における選手入場の「日の丸」を強調するかの写真が印象的だ。ただし、これは沖繩紙に限らず日本のほかの新聞もみな同じで、高層成層期に入つた二ツボンを誇らしげに伝える記事が続々と

「祝祭」で統一されている。そしてこの五輪報道の基調は、おおよその後、変わることなく今日まで続いてきたと言つてよからう。それが今回の五輪は、そもそも招致の段階から揺

別表から明らかによつて、一面トップ見出しは大きくは、①五輪「祝祭」報道、②コロナ禍中心報道、③両にらみ報道、に分かれる。そして①に分類できるのが、産経と読売である。ほぼ例外なく一面は、金文字分の1と説明)を伝える段階で、当時のメディアは迷

これらに対し、朝日は招致同様「悩む」が見られる紙面展開と言えないか。それはまた、特有のバランス感覚でもあつて、世の中の空気の反映とも言えるのかもしれない。最初は祝祭紙面、次は読売同様の分割(両にらみ)紙面、そして後半はコロナ紙面で、五輪・コロナ以外のニュースをトップ扱いした日からはほぼ同数だ。ここでは、③として分類しておくのがよからう。

地元紙の悩み さて沖繩紙である。およその時期、開幕時期は台風直撃、そして国内騒動の感染状況に見舞われ、五輪とコロナではない状況であつたともいえる。さらには世界遺産登録とも重なつた。本紙(琉球新報)はそれをきれいに反映した紙面展開であつた。また、辺野古新基地建設に絡むサンゴ

を回復する感嘆のひとつのよなものである。記憶から離れず、自分の距離を忘れず、揺らぐことのない軌跡を刻み続ける小さな感。誰もが声を静かに上げ始めている今、あの3月を思い出すには、あつた。 (専修大学教授・言論法 第2土曜掲載)

「渦」

身体から 日々 産み出される 不憂物

毎朝 渦の中に 流し込む

毎日 毎日 流し込む

今一番 流したいのは

毎日 流したいのは 私ほかも三日も流したい

僕だって 本当に流したいのもう一つ流したい

心はほとんど汚れた 腹はほとんど汚れた 心と腹はまるで僕

今日も汚れた心の みなさん おはよう

にしまた・とま 原野在住。第15回 作。

◆第1、